

令和3年度 第4医療系フォーラム実験小委員会 議事概要

- I. 日 時： 令和4年1月27日（木） 15:00～17:00
II. 場 所： 公益社団法人 私立大学情報教育協会
II. 出席者： 片岡主査、神原委員、原島委員、山元委員、小原委員、中山委員、二瓶委員、川島委員、井端事務局長、森下主幹

III. 資料

- ① 第4回医療系フォーラム実験小委員会次第
- ② 医療系フォーラム実験小委員会委員名簿
- ③ 2021年度実験授業の報告
「ICT活用による分野横断型実験授業の取組み」（A・L対話集会報告）
- ④ 第3回委員会議事概要

IV. 議事概要

1. 委員の変更について

三浦委員（慶應義塾大学）が大学退職のため委員を辞任されたことが報告された。

2. 令和3年度の実験授業の成果について

令和3年度の「ICT活用による分野横断型実験授業の取組み」について、片岡主査から以下のように報告された。

問題解決力養成を目的に、医療・福祉・栄養・情報コミュニケーション6分野の学生2グループが、Zoomによるテレビ会議とLineで意見交換し、「コロナ禍時代の持続可能な医療・健康生活を考える」授業を5回行い、「分野横断型の問題発見・課題解決」、「各分野の問題発見・課題解成果と問題点」など、多分野の視点を取り入れながら問題解決に取り組む授業デザイン、授業環境、授業運営等の詳細計画を研究することを目的に実施した。

授業は以下のように実施した。

(1) 授業の構成

- 1) ① オリエンテーション後、① 問題発見と整理、② 課題設定、③ 解決策の検討、④ 解決策の説明、からなる計5回の授業を実施した。
- 2) 1回のネット授業は90分。
- 3) グループにファシリテータとして2名の教員を配置。
- 4) 参加学生はネット上のディスカッションに関するマナーを事前に学び、ネット授業期間中は学生用ネット会議室を自由に利用できる。

(2) 授業の概要

- 1回目 オリエンテーション テーマ認識
・ 標書き出しシートの記入。・アイスブレイキング
- 2回目 問題発見、整理
・ コロナ禍の実体験を中心に、国内外で興味がある主なコロナ禍の社会現象を調べ、共有する
- 3回目 問題点の優先順位の決定、課題設定
・ コロナ禍と共存していく上での本質的な問題は何かを議論する。・課題を決定する。
- 4回目 解決策の検討
・ 課題に対す得る対応策、「解決策を検討する。（グループプロダクト作成
- 5回目 解決策の説明
・ 2グループが合流して解決策の構想を発表し、討議を行う。

- ・ 教員からの意見を反映して、グループプロダクトを完成する。
- ・ 各自が学修レポート「コロナ禍時代の持続可能な医療・健康生活について」を提出。
- ・ ポートフォリオを記入する。

(3) Web ベース分野連携 PBL のプラットフォーム

1) CT 学修支援システム

インターネット接続があれば特別なソフトは不要なシステムで実施した。

- ・ Google ドキュメント・スライド ・ ZOOM ・ Line ・ 掲示板 等

2) 学生用ガイド

- ・ 学修の進め方 ・ プロダクト作成 ・ 提出物と提出期限などを詳細に記述し、URL や QR コードから ICT 学修支援システムにアクセス可能にし、クリックすると、該当する日の授業内容、ネット会議 (zoom のアドレス)、教材などを閲覧できるようにした。

(4) 学生プロダクトの一部と成果について

- 1) 2回目 問題発見、整理 「実体験を通じて興味がある社会問題（個人）」では、
 - ・ コロナ禍における障がい者雇用 ・ 新型インフルエンザ等対策特別措置法と緊急事態宣言について ・ 看取りができない家族 ・ 食と健康の問題 ・ SNS でのデマ横行について ・ コロナ感染者数の報道について ・ コロナワクチンに対する報道の仕方 ・ コロナ禍における同調圧力 ・ 生活リズムの乱れがメンタルヘルスへ及ぼす影響などが話し合われた。
- 2) 2回目 問題発見、整理では、「コロナ禍で医療・健康生活を続ける上で重要な問題」（グループ）」としてメディア、心理、情報リテラシー、食、雇用など幅広い問題を抽出。
- 3) 3回目 問題点の優先順位の決定 課題設定では、問題同士の関連図を作成 ⇒ 問題の二次元展開図を作成し、緊急度と重要度を考慮して対応する順番を決めた。
- 4) 4回目 解決策の検討では、共通の課題「フレイルの予防に取り組む」について、予防策を考え・実行することに、医学・歯学・栄養学・社会福祉学それぞれの視点を活かすこと、情報コミュニケーション学の学生が専門家に意見をうかがったり、それぞれの意見を総括し発信することなどを行った。

成果

これらの取り組みを通じて、コロナ禍と共存していく上での本質的な問題は何か、メディア、心理、情報リテラシー、食、雇用など幅広い問題を抽出して問題発見、整理し、問題点の優先順位の決定や課題設定、解決策の検討、解決策の説明などが実施できたのではない。

(5) 学生アンケート結果

アンケートは「①とてもそう思う ②ややそう思う ③あまりそう思わない ④まったくそう思わない」の選択肢で実施したが、「①とてもそう思う」の割合) は以下の通り。

- 1 今回の PBL によって、学修意欲が高まった。7 割
- 2 他のグループメンバーとのディスカッションで問題への興味がさらに深まった。8 割
- 3 他学部（科）学生とディスカッションをしたことは、自分にとってよい刺激だ。10 割
- 4 今回の PBL を通じて、コミュニケーションの重要性が理解できた。9 割
- 5 他学部（科）学生は、今の自分にはない専門的な知識を所有していた。10 割
- 6 他学部（科）学生と協力してグループプロダクトを作成することができた。9 割
- 7 今回の PBL が終了して充実した気持ちである。10 割

(6) 学際性教育(Interprofessional education)

Leathard A 1994, 2003

学際性教育

- ・ 「専門性」と「専門性」の関連性を考えること
- ・ 個々の専門職が、他の専門職と向き合うとき、どうやって向き合えば良いか、その意味を考えること

学際性教育の目標

1. 「誰のためのチーム」なのか合意がとれている
2. 他の専門性を理解することで自分の専門性を客観視できる
3. チーム全体の目標と動きの中で自分の役割と専門性を位置づけることができる
4. 他の専門職に対してリスペクト

学際性教育の一般性と専門性

一般性： コロナ禍時代の持続可能な医療・健康生活を考え、解決するにあたり、チーム全員が知っておくべきこと

専門性： 特定の領域における高度な知識と実践性、および根拠を有する

コロナ禍時代の持続可能な医療・健康生活を考える中で、「他の専門と共有する部分を構築する」、「関連する全体像の理解」、「他の専門性の尊重と協働」、「共通の倫理を身につける」などの取り組みができたのではないかな。

(7) 学生アンケートに寄せられた声

- ・ この経験は新鮮でした。自分の専門外のこともたくさん知れて知識の幅が広がった。
- ・ コロナという共通のお題に対して、こんなに視点が違うとは思わなかった。そして、それぞれの視点を生かしてグループオリジナルの解決策を検討するのはとても有意義だった。
- ・ 自分の知らない世界は広いことを実感した。
- ・ 様々な視点からの意見・考えを取り入れた解決策は、ニーズに合った包括的な支援や全人的医療にもつながると考えました。

(8) 改善すべき点と対応策

改善すべき点と対応策

- 1) お互いの専門性に対する理解が不十分だった。
※ お互いの専門性を把握するようにする。(自分の専門分野を説明する)
- 2) 学生のみがディスカッションをする場がなかった。
※ ディスカッションする場を提供する。

上記を円滑に進めるファシリテーションを準備することで「コロナ禍における問題をさらに掘り下げたり、強みを活かした解決策を検討できるのではないかな。
--

(9) 今回の経験を生かした授業の進め方

- 1) 2回目に「ファシリテーターと学生のディスカッション」を追加し、ディスカッションの方向付けを行う
- 2) その後の自己主導型学修に「学生同士のディスカッション(同期/非同期)」を追加し、熟慮させる。
- 3) 3回目に、「ファシリテーターと学生のディスカッション」を追加し、「リソース講義(オンデマンド/リアルタイム)」を行うことでディスカッションの深化を図る。

(10) ICT を活用した授業変革 SAMR モデル (Puentendura, 2013)

授業の変革

授業の再定義 (Redefinition)

これまで想定されなかった能力、資質を引き出す授業

授業の改良 (Modification)

対面授業では習得できなかったことが学べる

授業の強化

授業内容の拡大 (Augmentation)

従来ツールの代用と、新たな機能が追加

対面授業の置換 (Substitution)

機能的な変更はなく、従来ツールの代授業の再定義

3. 主な意見

- ① 12月に今回参加した学生にグループインタビューを実施、現在分析中なので改めて報告する。学生のアンケートや考察では、学生にとって新鮮であり刺激になる授業であったと思う。特徴的なものを以下に紹介する。
 - ・ 授業終了後も自主的に考察を行うなど意欲的に取り組んでいる。
 - ・ 新鮮で刺激的であったとの声が多く聞かれた。
 - ・ 面識のない他分野の学生に、相手のことを考えてどう伝えるかに苦労したが、居心地よく参加できた。
 - ・ ディスカッションは、自分の立ち位置を考え、相手を考えて行い、医療から行動経済学なども学ぶようにした。
 - ・ 限られた時間でモチベーションを高めるため、意見が詰まった時などにファシリテータの助言が欲しい。
- ② 自分の立ち位置などディスカッションで物足りない気がしたが後半は良くなった。
- ③ ファシリテータが学生思考を妨げない工夫が必要である。
- ④ 学生のICT環境を活かし有効に活用する力が向上しており、専門分野の学びに使いこなす力を感じた。
- ⑤ 2グループがお互いに刺激を与え、相互に確認して授業ができたことは有効だった。
- ⑥ 学生が自発的に自分たちだけで集まって話し合う機会や場所を設けるべきであった。
- ⑦ 学生が打ち解ける時間（アイスブレイキング等）の工夫が必要と感じたが、後半はかなり打ち解けて進んでいた。
- ⑧ 情報コミュニケーションの学生は凄い刺激を受け、異分野とはこういうことかと自覚し、医療と人文社会学がかかわりあって考えることの重要性を理解した。
- ⑨ 学生の感性、気づき、表現力は優れていると感じた。
- ⑩ 問題の抽出では、答えのわかりそうなものを選定する傾向があるのが問題。なぜこの問題を抽出したのかの論理的な説明が不足している。この部分にファシリテータの助言が必要ではないか。
- ⑪ 議論の際のコミュニケーション力は不足しているが、解決策のまとめはそれなりに優れている。また、方面からアプローチする力と知識が不足しているように感じた。
- ⑫ 今の大学教育のアキレス腱がこの実験授業で浮き彫りになったと思う。「答えの有るものを求める」、「異質なものの中で自分の立ち位置の明確化ができない」、「自分分野の限界を知り多方面から解決にアプローチする力の不足」、これが重要である。

- ⑭ 問題発見、課題解決に於いて、「共創力を発揮する力」、「異質な分野の力を組み合わせて壁を突破する力」が重要であり、これを経験させるPBLが重要になるので、3月の産学連携人材ニーズ交流会で新しい取組みを提案するように計画している。

4. 次年度の進め方について

本年度は、情報コミュニケーション学部の学生にも入っていただき医療系からかなり発展的な展開ができた。次年度は3年生にこだわることなくさらに発展的な実験授業を展開したい。

1) 実験授業の時期

国家試験等を考えると6月スタートで9月に終了が望ましい。

2) 内容

- ・問題解決でなく、問題に様々な視点で取り組む、自分の立ち位置で問題提起する力を狙う。
- ・学生が自由に集まってディスカッションする時間と場所をつくる。
- ・進め方の説明動画なども考えられる。
- ・ファシリテータがもっと入って考える視点を与えることも検討する。
- ・ファシリテータに人文科学系の教員も入った方が良いのではないかな。
- ・医療は医療従事者に問題ではなく、最終的には個人一人一人の問題であることを考えないといけない。
- ・今年度は健康と医療がフレイルになってしまった。医療と情報コミュニケーションがお互い遠慮せず、リスペクトする中で課題解決に取り組むようにする。
- ・6月～9月で夏休みも含めて十分なコミュニケーションが取れるように設定する。
- ・最低、3週間に1日くらいのコミュニケーションで考えを深めさせ、2グループを同時に走らせる。
- ・テーマは「医療と健康」とする
- ・倫理委員会とポスターを先に進め、6月に実験授業を開始する。
- ・情報コミュニケーションの学生は2年生、3年生で最低2名をお願いする。
- ・6月～9月の木曜日で5日を委員の日程に合わせて実験授業を設定する。

5. 次回の委員会について

3月24日（木）14：00とする。